山里氏発表へのコメント

泉水　英計（神奈川大学アジア研究センター所員）

本日の講演の中でご紹介のあった新書を拝読し、重ねて本日の山里先生のご発表を伺い、山里先生のご研究は米国公文書の一次資料の読み込みと、米国留学経験者の内部ヒストリーの語りが相補的にかみ合って、文献調査とインタビュー、それぞれの聴取が効果的に発揮されたものだと思いました。この本は新書ですし、特に後書きに、涙なしでは読めないようなすごくいい話が載ってますので、ぜひ皆さん手に取って読んでいただきたいと思います。

ここで言う公文書には、沖縄人の留学生がアメリカでホストファミリーに沖縄の基地問題を訴え、そのホストファミリーが陸軍省に苦言を呈したとして陸軍省から問いただされた現地の米国2世が弁解しているというものまで資料としてあります。またインタビューについては、数年前の戦闘で敵国に留学することをどう思うかと質問していることの先入観を剝ぎ取られた、先生は浅はかさとご自分で書いてありましたが、そういうくだりをとても印象深く読みました。

戦後沖縄の住民には沖縄戦を生き延びた人ばかりではなく、疎開者や外地からの引き揚げ者、アメリカやブラジルの移民、両親が沖縄出身というだけでそもそも戦前の沖縄を知らない人まで、さまざまな背景を持っていました。本日のお話でも本当に日本が友軍だったのか、つまり米軍が敵軍だったのかというような語りの証言もありました。その多様性を意識する時、もはや対話の相手は「米留組」というカテゴリーの客体ではなく、それぞれの希望を抱いて人生を歩む主体的行為者として立ち現れます。そのような人々が「米留」制度の思惑を越えていく様が、積極的に描かれたと思います。

さて、せっかく頂いた機会ですので米軍統治下、沖縄からの米国留学を巡るご考察に、以下の3つの方向から質問させていただきます。第1に日本との関係について、第2にアメリカ社会の観察に関連して、第3に他の国々からの米国留学との比較についてです。

まず日本との関係についてですが、一つは米国留学中の沖縄人と日本人はどのような関係だったのでしょうか。私は米軍統治下の沖縄の医療に関心があり、国民指導員の養成制度、これナショナル・リーダー・プログラムと言いますが、これで渡米研修を受けた人の記録を調べたことがあります。この国民指導員という時の「国民」が何を指すのか、これはとても興味深いところで、日本国民とは区別される琉球国民かとも疑いました。しかし必ずしもそうではない。というのは技術的な研修は個々に行うのですが、例えばワシントンの名所を巡るようなオリエンテーションは、東京から行った人たちと一緒にしていたようなのです。

山里先生のご本で紹介された例でも、横浜から出発した方がいれば、一方で沖縄の嘉手納の空軍基地から出たという方もおられた。沖縄人と日本人の留学生はどれぐらい一緒にされていたのか。一緒になった時にお互いをどのように認識していたのかが気になります。また部分的にでも一緒にされるのは対象言語、つまり日本語のサポートで済むということも要因かと思います。1950年に米国に留学した、例えば台湾人は、中国語でなく日本語の中等教育を受けた者も混じっていたと推察します。沖縄人留学生はこういう旧日本植民地出身者との出会いについて語るとこがあったのか、伺いたいと思います。

日本との関係でもう一点お伺いしたいのは、日本留学制度はどこまでプロパガンダと見なすことができるかということです。安定した統治のために米軍は親米的指導者を育成したと言います。同じような視点で日本政府の教育援助を見ることがどこまで可能でしょうか。米国民政府が、契約学生をやめ、国費留学も随時中断の権利を保持していたのは、括弧付きですけど「共産主義」や日本のナショナリズムを警戒していたからだと思います。

では、日本政府自身では親日的指導者を育成する思惑があったのでしょうか。そういう思惑があった

として、日本留学した人々はどれぐらいその思惑をはみ出す主体的な行動を取ることができたのでしょうか。本日のお話で「日留」、日本留学を見ていく必要性に触れられたのは、このような意味だと私は理解しています。

次はアメリカ社会の観察です。渡米後の留学生たちのさまざまな体験を興味深く読みました。特にそれが米軍統治下の沖縄社会を相対化する経験であったことに目を開かれました。例えば民主主義を喧伝（けんでん）しているのに、歴然とした人種差別がまかり通っていたということです。ただし、人種差別は沖縄でも米兵用の歓楽街には、白人用と黒人用に峻別されていたりして、留学前から分かっている人は分かっていたはずです。

むしろ目を引かれたのは白人の掃除夫がいて驚いたというような回想です。あるいは白人の床屋に髪を切ってもらって、違和感を感じたというような回想です。これと似た話として、旧満州で生まれ育った日本人が、日本に初めて来て、日本人の掃除夫を見て驚いたっていうような回想を読んだ記憶があります。これらはつまり、特定の役割は特定のカテゴリーの人間によって占められ、それがあたかも自然のことのように固定している植民地社会の在り方が、原因となっている違和感でしょう。被植民地者の役割はサービスであるというとこからは、先ほどのゴンザレス先生の Labor of Intimacy にも通じるように見えます。

アメリカ社会を観察した留学生たちは、沖縄で慣れ親しんだ社会的役割が決して固定的なものじゃないという確信を得ることで、それを自然なものとする植民地的心性、つまり心まで占領されていたということを自覚したといいます。自覚したということは、植民地的心性から一歩脱却したということでしょう。その経験は、自分自身を改めて見つめ直す機会でもあったことが描かれています。

留学生たちは自分が敵国人であり、非黒人であり、インディアンに近かったり、韓国人から質問されたりと、多様な米国住民との接触からさまざまな自分を見いだしていったようです。留学生が出会う米国住民には沖縄系米国人もいたと思います。沖縄戦の記録には、沖縄系 2 世兵士がよく登場します。あるいは復興援助の時期に沖縄系米国人団体が活躍しました。今日のお話にも少し触れられていました。改めて自分自身を見つめ直す留学生たちは、このような沖縄系米国人とはどういう関係にあったのでしょうか。

最後の質問は、他の国々からの米国留学制度との比較についてです。言い換えると、米国の勢力圏下のアジアパシフィックの国々からの留学制度における沖縄の「米留」制度の位置です。比較の対象にはもちろん日本からの米国留学制度が含まれます。これについては山里先生は既に沖縄に相対的に米国留学生が多かったこと、それからまた沖縄からの米国留学を管轄したのが外交を担う国務省ではなく、陸軍省であったことを指摘されています。日本もまだ占領期であった時ですが、日本では民主化が進んでいるが、沖縄では人々が米軍を前に萎縮しているという大田元県知事の回想が本に載っています。米軍の存在感に大きな差異があったことが分かります。

では、日本以外の国々からの米国留学制度とはどのような比較ができるでしょうか。韓国や台湾からの留学は、独立国であったから国務省だったと思います。軍ということであれば、海軍が管轄していたミクロネシアからの留学はどのようなものであったか気になります。最終的に米国まで行くのか分かりませんが、米軍による旧日本領の人々の再教育の例を一つ、ご紹介したいと思います。これが米軍による旧日本領、南洋群島の再教育の出発点の写真です。これはバーニス・ローレンスという人の記録に含まれる写真です。

1950 年にトラック島に教員養成学校が設立されました。彼女はその教官となりました。日本の委任統治領だった南洋群島では、日本語教育が行われていましたが、戦後は米国海軍が管轄するミクロネシアとなりました。ミクロネシア全体から学生がトラック島に集められ、米国の庇護（ひご）の下で新しい社会をつくるために教員の訓練を受けています。彼らが新世代の最初のインテリとなります。

よく見ると日本的な名前があるんですが、これは現在の小笠原諸島からの研修生などです。軍政研究などでサイパンが沖縄のモデルとなったなどということがいわれます。戦後の米国による教育でミクロネシアと沖縄にどのような共通性と差異があったのか、もし先生が見通しをお持ちでしたら教えていた

だきたいと思います。

最後にもう一つ、今日この機会に討論に出てきたアジアからの米国留学は、フィリピンからの米国留学でしょうか。筑波大学に鈴木伸隆さんというフィリピン研究者の知人がいます。今日は授業があって残念ながらここには来ていないのですが、彼は山里先生の新書に強い関心を持って、出版されてすぐ読んだと言ってました。それで私は今日のコメントで、沖縄と日本以外の米国留学との比較について尋ねてみたいと彼に言ったところ、彼が教えてくれたのがこの論文でした。

ここにあるペンシオナードというのは、米国がフィリピンを植民地にした後、1903 年からエリート養成のために始めた米国留学制度で、第 2 次世界大戦で日本が占領するまで続きました。鈴木先生はペンシオナードを成功裏に運営した経験が、戦後の「米留」制度に生かされたという仮説のようです。今日はフィリピン専門家が多いので、私がここでこういうことを言っているのは非常に恥ずかしいんですが、後で補ってください。山里先生は沖縄の「米留」制度の成立過程についてどのようにお考えでしょうか、伺いたいと思います。

以上、第 1 の日本との関係については、米国留学中の日本人、あるいは旧日本植民地の台湾人などとどの程度一緒でどのような関係であったか。日本留学制度についてどの程度まで「米留」と同じような分析が可能か。第 2 のアメリカ社会の観察に関連しては、留学生と沖縄系米国人との関係はどのようであったか。第 3 の他の国々からの米国留学については、ミクロネシアとかフィリピンとかからの米国留学とどういう関係にあるか、あるいはどのように比較できそうかお考えを伺いたいと思いました。以上で私の質問です。ありがとうございました。